

あとがき

出発直前に右腕を骨折して、ギブスで固定して三角帯で掲げる、という痛ましい姿で船に乗り込んだが、多くの人に支えられて105日間の船旅を終えて横浜港まで戻ってきた。まずはドクターはじめお世話になった船の友達に感謝申し上げます。

2008年、第60回ピースボートに参加して南半球一周の船旅を体験した。18の港に寄港して、20余の都市を訪れた。ケープタウンやリオデジャネイロ、タヒチ、イースター島、シドニーなど赤道よりも南に位置する街は、どこも自然美豊かで地球の素晴らしさを満喫する船旅だった。特に念願であった南極探検クルーズは思い出深い。

それから6年、70歳を超えて長い旅はもう無理かな、と思っていたが、北極へも行ってみたい、という想いが募り、再びピースボートに乗船することになった。この87回ピースボートでは北半球の諸都市を巡り、途中フィヨルドを遊覧して、北極海の探検クルーズにも参加することができた。

今回の北半球一周の船旅は、世界遺産を巡る旅でもあった。地中海沿岸のギリシャ・ローマ時代の古代都市遺跡やマチュピチュの石造遺跡に、古の人たちの高い創造性と技術の素晴らしさに驚嘆した。私達が日頃見慣れている東京や上海、ニューヨークのようなコンクリートジャングルとは異なった、歴史ある北欧の美しい街並みに魅了され、伝統を守りながら豊かな生活を求める人たちに感銘を受けた。

北極海では厳しい自然の中で生きる動物たちを観察して、自然を守り後世に伝えていくことの重要性を改めて認識した。

それぞれの寄港地には短い滞在期間で、うわべだけの観光旅行ではあったが、それぞれに思い出がある。訪問したところが新聞、雑誌やテレビに登場すると、訪れた街並みが思い出されて、懐かしく見入ってしまう。70歳を超えて今更という思いもあるが、少しばかり視野が広がったのかなと思う。

私自身は、船内で開かれたイベントにはあまり参加しなかったが、友人の中には、一日中船内を駆け回り、キャビンには眠りに戻るだけ、というアクティブな人もいた。船旅には、それぞれに楽しみ方がある。

たくさんの友人ができたことも、大きな喜びである。60回クルーズで一緒だった懐かしい友人に再会できたことも、嬉しい出来事である。

とかく誹謗中傷的な噂が絶えないピースボートの船旅であるが、安価に気楽に世界を旅するには手頃な手段である。多くの人が多様な目的を持って参加しているのもピースボートの特徴である。ピースボートの参加者にはリピーターが多く、5回、6回と回を重ねる人も多い。それだけの魅力がある、ということだろう。

2010年に「南半球編」を出版してから約6年、再び「北半球編」を出版することができた。この本がこれから世界一周の船旅を目指す人の参考になれば幸いである。また、世界一

周の船旅を経験した人がこの本を読みながら、もう一度思い出の旅を巡ることができれば、望外の喜びである。本書の出版にあたり、写真を提供していただきました中村智行氏、井山昭武氏にお礼を申し上げます。また、前回と同様に出版の労を引き受けていただきましたあけび書房株式会社の久保則之氏には大変お世話になりました。厚くお礼を申し上げます。

2016年11月24日

筆者 水野 博之

52年ぶりに晩秋の雪が舞う自宅の庭を眺めながら